

システムとは、何か？

no w here

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不完全な転生をした、一人の青年のお話。

目次

1	P r o l o g u e	1
2	逃避	6
3	蜘蛛の巣	11
4	1人と1匹、そして1柱	15
5	無望	20
B 1	側近と”修羅”	24
6	変遷	28
7	途絶	33
8	認知	37

1 Prologue

朝、目を覚ます。

本当の親は既に亡くなって親戚に引き取られた身である以上、何らかのメリットを示し続けなければいけない。遺産だけが欲しいという親類など珍しい物ではないだろう、誰が好き好んで血も繋がらない赤の他人の世話を焼こうと言う物か。

だから自分は親戚の家事を高校以外では引き受ける。中学の家庭科でよい成績を取る事が出来ていたのが幸いし、4年続けた今では主婦ぐらいにはできるようになっている。流石にこの歳でバイトができない事は親戚も分かっていたのだろう、特に何も言わず食費の6万は月初めに準備してくれた。

学費免除のある高校で特待生になった。親戚はそれを大層喜んでくれたが、特待生というよりは特待生の制度によって学費が免除されることを喜んでいるのかもしれない。

故に日課の家事である掃除から始める。毎日やっている関係、目立つ汚れと言う物は特にならない。30分ほどで掃除が終わった。

続いて朝御飯及び弁当の準備。下拵えは既に昨日の夜に出来ている。常備菜の補充も2日前にやった以上余裕はある。1時間ほどで片付けまで済み——現在時刻は06:00、高校の始業は09:00だが剣道部の朝練が7:00からある。準備し、高校へ。

「いってきます」

返答は、今日も無かった。

>>

日課の朝練を熟し、解散後そのまま教室へ向かう。疎らながらも大半の同級生が揃っていた。軽く挨拶をすれば相手も返してくれる。一通り挨拶をした後、机の引き出しに教科書やノートを入れていく。暫くすると隣の席に独りの美少女（本当にそうとしか言えない）が座った。

「おはよう」

声をかける。小さく肩を震わせた後、彼女若葉姫色から小さな声で

「おはよう、ごぞいましゅ」と返される。気だるげな美少女という見た目に対して反応は何処か小動物じみた可愛らしい物。既に2年目の付き合いだというのに、挨拶に慣れていないのは…まあ、自分の顔が良いとは言えないからだろう。声をかけられても迷惑なのかもしれない。

「…前も言ったと思うけど、もしも嫌だったら遠慮なく言ってね…なんて言ったら逆に言い辛いか」

彼女はそれに反して首を横に振る。どちらの意味なのか分からず、首を傾げて居る中彼女が言葉をつづけようとし――

始業の鐘が、鳴り響いた。

直後に来る先生に、彼女は恨みがまし様子を向け、さらに時計にも同じように目を向ける。どうにも彼女の間は悪いらしい。

>>

古文の授業。

自分は、窓際の席だった。だからこそ――山田俊輔の視線の先にあつた空間の亀裂を見た直後閉めていた窓を開ける事が出来た。

「――、ッ！」

「え」

若葉さんから驚きを含んだ声が一言。岡崎香奈美先生の朗読の声も、透き通った若葉さんの驚きの声で途切れる。ゆえに彼を除く同級生たちの注目を集めてしまった。

「逃げるッ」

それだけ声を上げ、窓から飛び降りる。二階の窓から混凝土の路面は当たり所が悪ければ即死だろう。

だが、空間の亀裂から感じた悪寒はそれ以上に「死」を連想させた。飛び降りたほうが、その死よりもまだまし。咄嗟ながらも、近くにいた若葉さんも飛び降りるに巻き込んだのは申し訳ないと思ひ――

今に至る。

故に見えるべきは空の筈だ。何故岩盤が見える。

あの高さから背中を叩きつけければ自然と頭も打ち付けられる。そ

れに反して背中中の皮膚だけが岩肌にくっついたような痛み。

それを認識し直すことで——脳には嘗てないほどの痛みが訴えられる。

自分の口から発される叫び。とにかく、この痛みから逃げたかった。

剥がそうと藻搔けばブチブチと嫌な音が聞こえる。千切れる度に突き刺すような痛みを襲われ、徐々に動く気を失っていった。動けるが、現代では感じたことのないその痛みに自ら向かうだけの精神はなかった。

>>

数分後。

声を出すだけの気力も失い、背中中の痛みにも慣れた頃。漸く、自分自身以外以外の皆の事に意識を馳せる事が出来た。

「…皆、は…」

死んでいる、だろう。自分以外で教室から出ようとするだけの余裕はなかったように見える。

だが——一緒に連れ出せたはずの若葉さんが居ない。少なくともあの悪寒から遠ざけるように、抱きかかえた彼女は一緒に居てもおかしくはない。

彼女は無事だろうか——無事でなくとも、一命はとりとめていてほしい。

そう思いながらも、痛まない範囲で首を動かし——何かと、眼があった。息をのむ。それは、骨だった。恐らくは大人の——石化した事を除けば、いたって普通の。

その骨の先から、何かがじっとこちらを見ていた。複数の複眼は、恐らく蟲だろう——相手も気付いたのか、一匹が此方へ向かって飛びつく。蜘蛛——それも、自分の体の半分以上もありそうな。

呑んだ息が、小さな悲鳴として吐き出された。それを期に、周りから複数の足音が漸く耳に入り。それが、近づいてくる。それも、恐ろしい速さで。

その音が無くなると同時、

「ッ?」

左脇腹、右腕、左脚、左腕に突き刺さる何か。刺さった後になにやら液体らしきものが浸透していく。だが、それ以上に突き刺さったそれが引き抜かれることによる失血の方が、速い。

「ぎ……イア……」

枯れたはずの聲が喉から再度響かせる。

だが、これはただの悲鳴ではない——断末魔だと、自認した。巨大な蜘蛛たちの牙が、無造作に突き刺さっていき穴を穿つ。穿たれた穴からは自身の体温と共に血が流れ出ていき——右膝からの痛みで頭が一瞬真っ白になる。

微かに頭を上げれば、離れた場所に誰かの足を引き摺って行く巨大な蜘蛛。——足を持っていかれた、それに気づき背中の皮膚を岩肌において行きながら身を起こす。

このままだと、食われる。自分は獲物で、彼らは狩人。既に右脚は持っていていかれたため立つことはできない。もっと早く、身を起こすべきだった——!

後悔をしながらも——それでも、今はまだ生きている。穴が穿たれた場所から先は何れも反応を返さない。動かない左腕を、強引に振り子の容量で叩きつけると、巨大な蜘蛛の1匹は剥がせた。蟲は巨大になりすぎると足が自重を支えられなくなる、なんて話があつたような気がする。巨大な蜘蛛たちは体内を軽くすることでそれを克服したらしい。

「キシヤ!?!」

「キシヤ——!」

抵抗する獲物に驚く1匹と、それを追いだすように此方を囲む2匹。獲物の分け前が少なくなる事を、恐れたのだろうか。返すように左腕を叩きつける事でもう一匹引きはがす。

「死んで、たま……ッ?」

あげていた上体から、力が抜ける。その際に、水に沈む感覚——ああ、血を失くしすぎた。動かそうとしても、動かない。だからこそ、残された五感が鋭利になるわけで。

生きたままらぬ匹の巨大な蜘蛛に食られて行く。悲鳴を上げるだけの能力も無く、ただ霞む視界で食られて行く自身だった何かを見る事しかできない。

警戒されたのか、両腕から引つ張られ穴から先の両手が千切れる。痛みで気を失いたかつたのに、存外自分の精神は強靱に過ぎたらしい。次は残された左脚。千切られた後、白い糸を巻いていた。保存食だろうか。

蜘蛛たちが行う自分の解体ショーは、下半身と上半身を千切り内臓を引き摺り出されるまで見続けていた。：最後まで見守るのは当事者である蜘蛛2匹と——石化した、人の骨だけだろう。

微かに繋がっていた意識が、プツリと音を立てて落ちた。

2 逃避

「…は、え？」

再度眼前に広がっているそれを見て、呆けた声を上げる。意識が落ちて、幾許もなく目を覚ます。先ほどの巨大な蜘蛛に貪られる感覚は、夢というには生々しかった。

なら、自分はそこで死んだ？

死んだのであれば此処は天国？…天国というにはあまりにも先程と変わらない。自身の状態を確認する。岩肌^いに張り付けられた背中以外^そは全て無事だった。

「ッ」

上げそうになる悲鳴を、食い縛る事で強引に口の中で反芻させる。呆然、夢中となった状態から意識を取り戻すと反動のように痛みが襲い掛かる事は過去にも数度小学校の駆けっこの時に1位を取りたいが為に転んで擦りむいた膝のまま走ったりとか、剣道の試合で無我夢中になって相手の一撃を貰いながらも有効打突を叩き込んだりとかあるが、其れよりもはるかに重傷でも同様に適用される事を知りたくはなかった。

>>

食い縛ったまま数分。幸いにも岩肌に接していることもあって流血は少ない。痛みに頭を苛まれながらもどうにか思考を纏めていく。振り返るのはつい先ほどやった。

先ずは英語の 5 W 1 H where, who, why, what, when, how. 一番重要なことを先頭にもってくるニュース記事を書くときの慣行であり、重要な情報を纏めるのにも適する。

此処は何処か。分からないが、少なくとも岩盤が見える以上洞窟のような場所ではないだろうか。

誰か。少なくとも自分はやっていない。

何故。知りようがない。

何が。自分が此処に来ていた。

何時。自分が若葉さんを強引に連れ出して飛び降りた直後。ただ、

そこで一度意識が途切れてる。

ど^hのように。分^wからない。

纏めると「自分が若葉さんを強引に連れ出して飛び降りた直後、洞窟のような場所になぜかわからないが来ていた。誰或いは何がどのような目的でどのようなにやったのかは不明」。…何一つ分かった気がしない。自分が洞窟のような場所に来たこと、強引に連れ出したはずの若葉さんの安否は不明であること。…これだけ聞くと自分はずも最低な輩ではないだろうか、少しへこんだ。

首だけを動かして周囲を見回す。先程も見た、石化した頭蓋骨。化石のようになつた其れから先には先程と違つて複眼が無かつた。小さく息を吐き出す。四肢は現状無事である。

「…夢、…?」

先ほどの死が夢だとしたら、此処で死んだら本当に死ぬという事になる。ただ、夢というには先程の死は鮮明に過ぎる。巨大な蜘蛛に自分の体を分割された肉塊の塊に生きてまますされるのを見て死んだ。…その時の痛みが、四肢に走る。

「っ!」

首を上げてみる。四肢は無事だった。動かそうと思えば、いずれの手足も動く。何故?分らない。

…「恐怖とは未知から来る」なんてどこかの心理学者が言っていた気がする。その意味が分かつた。冷静になつて考えてみれば、分かつている事は「自分が洞窟のような場所に飛び降りたらいた」という事だけ。その後起こつた夢とも現実とも区別がつかない巨大な蜘蛛に喰られて死ぬ出来事、でも何故か喰られたはずの体は元に戻っている。

何故。

そこで、脳が理解を拒絶した。

>>

「…、逃げ…いや、若葉さんは…ッ」

拒絶して数分。

自身が行動に移そうとして。漸く強引に連れ出した若葉さんの事

に考えが至る。せめて、自分が勝手に連れ出した彼女の安否は確認しないと。

ぱりぱりと引き抜かれて行く激痛を食いしぼりながら身を起こす。…このままだと遠からず失血で危険な状態になる。幸いにも学ランタイプの制服だったので、ボタンを外して脱ぐことで背への負担を軽減する。その後ボタンを付け直し、後ろ前に着こむ——ボタンの金具や布地が背中の肉を引っ掻くが、先程の岩肌よりはよほどましだ。

後は、何か紐のような物で圧迫すれば背中からの失血に対する延命処置はできるだろうか。…分らないが、少なくとも流し続けるよりはましになる。ポケットを見るがあるのはハンカチとティッシュ、財布硬貨12枚が入っている。ぐらいいずれも役に立つとは思えなかった。

先ほどの：“予知夢脳が理解を拒絶した、夢とも現実ともつかない現象に対する定義。”なら、悲鳴を上げた後に巨大な蜘蛛がやってきた。蜘蛛という個体を考えるのであれば、巣を張って獲物が引っかかるのを待つ種別の印象が強い。あそこまで大きな個体であれば、作り出す紐の強度も高いだろう。

「…やってみる、しかないか…」

眩く。手が震える。予知夢で自分を解体した存在を、怖くないと言える人は居ないと思う。やるしかない、やってやる——そう決意し、声を出した。

「うわああああああ!!」

ありきたり、然して一番出しやすい悲鳴。洞窟の近くが騒がしくなる。背中の痛みを我慢しながら岩の裏に隠れる。

>>

暫くした後、瓦礫からこっそり片目で見る。

——先程の巨大な蜘蛛の他にも蛇、蛙、ペンギンともペリカンとも似つかない何か、大量のゲジゲジ、灰色のトカゲ、図鑑でしか見たことのないような恐竜を小型化した物が集っていた。

失敗した、此処で気付いた。予知夢と先程では状況が違い過ぎる。具体的に言うとは即座に悲鳴を上げていたのを我慢した事。その悲鳴

より明らかに後で悲鳴を上げた以上、蜘蛛以外の固体が集ってもおかしくなかった…！

そう考えれば続いて悪い事も連想される。

この洞窟、光源がほとんどない。暗い中どうか目が慣れたことで2m程度先までは見えるがそれ以上先は殆ど見えない。故に聴力に特化した個体、暗視を持つ個体——蛇が生態的に持つ熱感知を持つ個体へと進化している可能性。否、可能性ではなく確定と見たほうがいい。悲観的に考えて、楽観的に行動する。

然して、この状況で楽観的になる余裕は何処にもなかった。

瓦礫に隠れ、痛む背中を無視して丸め、伏せる。直後——集まった地球上の動物特徴を持ちながらも、まるでモンスターのよう巨体化したそれらが激しく争う音が聞こえた。

突進する音、壁に何かがぶつかった轟音、咆哮、巨大な何かが飛ぶ風切り音。ゲームではよく聞きそうなそれらの音を、現実で聞くことになるとは思っても居なかった。聞きたくない、そんな願いに反して争いの音が大きくなる。激化しているのだろう。

>>

その音は大量の砂塵がぶつかる音と共に沈静化した。ひっそり見やると灰色のトカゲが魔物の死骸を貪っている。此方に目をやっていないうちに砂の付いた蜘蛛の死骸一つを持って行く。予知夢の通り、蜘蛛は軽かった——出糸突起糸を吐き出す機構はある為、その穴へ右手を付き込み紐を引き摺り出す。躊躇いはあったが、延命には代えられない。

幸運にも（この状況になった地点で最大の厄だと思う）、比較紐を溜め込んでいた個体らしい。粘度の無い紐を獲得し、背中を抑えつけるように巻いて行く。…ボタンの金具が刺さるが、これは我慢しよう。これで少しは——

轟音。瓦礫の先から聞こえたそれに身を竦める。2度、3度と聞こえ索敵されていたと分かり、転がるように瓦礫から跳び出す。直後隠れていた瓦礫に4つ目の大岩が突き刺さり崩れた。それなりに大きな瓦礫だったので崩落に巻き込まれたらひとたまりもないだろう。

崩れた瓦礫を見た後、灰色のトカゲが居た方へ眼を向ける。

此方を睨んでくる灰色のトカゲは鼻先から何の前触れもなく巨大な岩を作り出し、尻尾で此方に弾くように飛ばしてきた。着地直後で体勢も儘ならないが、前へとさらに飛び跳ねる。

自身の居た場所に巨大な岩が突き刺さっていた。あの質量で、突き刺さる程の威力を伴ったそれを受ければ——突き刺さった際の風に体勢がさらに崩れ、転がるように着地させられた。

「あ、ギョ!？」

ボタンが背中中の肉に突き刺さる感覚。

それが、今も生きているという証。

そう思っていないければやってられない。運動も勉学も特待生であるために積み重ねているが所詮は一般人だ、化け物退治等専門外に程がある。

灰色のトカゲから目を逸らさず、動きを見据え続ける。そのにらみ合いをしながらも、考える。

自分にあるものは財布、ハンカチ、ティッシュ。四肢は全部無事、周囲にはモンスターの死骸——灰色のトカゲが鼻先を持ち上げた、先程の岩飛ばし……

否。先ほど突き刺さった岩へと飛び込む。岩飛ばしと全く同じように見えたが——打ち出す時間が微かに遅い。たったそれだけではあるが、それは少なくとも間違いではなかった。

砕けたような音。小さなものが大量に飛翔する音。

「散弾、ッ」

ぼやき、岩の後ろで震えながらも、思考を続ける。

——敵は灰色のトカゲ。自分の目的は蜘蛛の糸の確保だから、逃亡できる。でも洞窟の場所は分からないから、初期位置だけでも——ピシリ、と音が聞こえた。

「ま、ず——ッ!」

跳び出す。散弾によって崩落した岩。

舌なめずりをする灰色のトカゲに、自分は何ができるか——逃げる。何処へ?ここじゃない何処かへ!

3 蜘蛛の巣

片目で奴を見据え、もう片目で再度周囲を見る。自身の周囲にあった岩だった物、それらの輪郭が徐々に失われて行くのが見えた。少なくとも岩だった物に脚を取られる危険性はなさそうだ。自分が焦って転ぶなどしなければ、だが。

自分から見て灰色のトカゲの右足が微かに動いた。それに合わせて右へ小さく跳ぶ。直後トカゲの前脚、その爪が自分がいたところの地面に突き刺さった。地面を突き刺す一撃を貰おうものなら、例え腕で防御していたとしても、その上から胴体へ負傷を与えるだろう。勿論、盾にした腕はお釈迦になる。

あの予知夢を思い出し、吐きそうになりながらも奴から距離を取る。

そして先程の挙動を確認する。

あの巨体の割には速い：が、確実に蜘蛛よりは遅かった。蜘蛛より遅いなら上り坂でもない限り、自分の足で十分逃げられる。

だが、それは相手も分かっているのだろう。睨み合いのまま膠着している事が、何よりもの証拠だ——自分が振り向いて逃げると同時に、岩による狙撃。間合いは5mで、自分が下り坂に位置する。しかも道幅は下り坂になる程狭いから岩による狙撃をされれば自分は岩と岩肌のサンドイッチ、中の具は確実に潰れる。相手が出した岩は何れも直径1mだと考えれば——次は左足。此方も左に小さく飛ぶ。小さく飛ぶ理由は単純。保険だ。

左足で小さく踏み出し、右足で奴は大きく踏み込んできた。

それに合わせ、小さく跳ぶ事で既についた両脚で右へ跳び直す。相手は狩人で自分は獲物、この状況は一切変わらない。大きく跳ばなければ躲せない状況でもない限り、着地の隙を狙われないよう小さく回避を刻む——自分が思いつく小細工じみた回避は、少なくともこの灰色のトカゲには通じていた。知性は動物程度、とみるべきか。

そして狙撃には2つの工程を踏む必要がある。岩を出す、尻尾で打つ。どちらかができないのであれば、岩による狙撃を気にする必要は

なくなる。岩を出せなくなるまで摩擦させる事は自分には不可能だろう、相手が一足で飛び掛かる方がよほど早い。跳び出す、此処で攻撃工程が終わる以上岩による狙撃等という無駄はしないとみる。

相手の眼圧が強い。足が震えそうになる、何でこんな——弱音を吐く暇はない、こぶしを強く握りしめる事で痛みによつて強引に意識を前に向け直す。

そうなる”尻尾の使用ができない”状態にする事が、勝利条件を満たすための最低条件。幸いにも、瓦礫の中には鋭い石もある。…もつといいものがある可能性もないわけではないが、なかつた時の落胆でトカゲに不意を打たれて死ぬなんて真似はしたくない。メインは瓦礫の鋭い石で奴の尻尾を負傷させる事、その際に必要なのは——次は両脚同時。奴の後ろに瓦礫及び瓦礫よりもいい物の可能性がある。道幅はだいたい下り坂の方は6m、上り坂の方は10m——壁へと走り伝うようにして突撃をやり過す。

必要なのは”負傷を狙えるだけの凶器 相手の尻尾へと向かえるだけの瞬間速度” 迎撃するために振るわれるであろう尻尾から目を逸らさない意志”。その機会を狙うためにスタミナを温存し、精神的に不安定な状態にならず、凶器を一度で尻尾にあてられるだけの技術及び運。

故に凶器のある場所——先程崩された瓦礫と石化した骨付近を片目で注視する。瓦礫——鋭い物、その中でも両手で用いれば相手の尾を刺し潰す事が出来るかもしれない物が1つ。投げて牽制に使える程度の礫は無数。

骨付近を見たのは単純、もしも駆除する人間がいるのであれば、その道具が残っている可能性。先ほどの蜘蛛の死体についていた砂と、石化した骨の色は同じだった。ならば、最近とみる事もできるかもしれない——その賭けの結果。

——骨の隙間に折れた槍の切っ先が隠れていた。

右手で折れた槍の切っ先、その残された柄を握る。短剣程度の長さしかないそれが、瓦礫よりもいい物なのかは分からないが——少なくとも、丸腰ではなくなつた。それが精神的な余裕を作り出す。

灰色のトカゲはそれを鼻で笑うように動作をした。すると同時に左手を盾にしながらかつ突つ込む。それに不意を打たれたのか、一瞬拳動が遅れて左かぎづめが振り下ろされたすのを踏み込むことで急静止してやり過ぎす。

自分ができる事なんて然程ない。

だから、出来る事をして相手の”小さな焦り”を重ね致命的な隙へと持って行く。今回の場合は攻撃直後、体を持ちあげる事は一瞬でも遅れる故に——此処で大きく、トカゲを飛び越す。

「——オアアアア!!」

咆える。

周りから敵を集めるかもしれない、これは愚行だと冷静な部分が告げる。然して本能は此処が最初で最後だと激しく拒否をした。

着地、目の前には尻尾。両手に残された槍の柄を持つ。奴が咄嗟に尻尾を横へ振れようとしたるよりも早く、槍の切っ先を灰色のトカゲへと突き刺した。漸く、奴が悲鳴を上げた。血で滑る其れを握り締めたまま、強引にねじ切ろうとし——唐突に尻尾から力が無くなつた。

「……えっ?」

目先を奴へと向ける。奴は——灰色のトカゲは、尻尾を切つて此方へ頭を向けていた。自分の体勢は完全に前のめりに崩れ、次の奴の一撃は回避できない事を察する。

怪我させるだけで留めるべきだった、怪我した尻尾を用いての射撃を恐れて、功を急ぐべきじゃなかった——!!

直後、奴の突進と——右前足が振りあげられていたのが見えたので血で滑る槍の切っ先で咄嗟に受け——目測が外れたかのような、防御の上から壁に叩きつけられた。

「つか、つか!」

肺に詰めていた息が強制的に吐き出させられず暇もなく、叩きつけた右前脚を軸に、左前脚のひっかきが背中を切り裂いた。息がない為、「かひゅ!」と奇妙な悲鳴を上げ——体勢を立て直すこともままならず、ゴロゴロと下り坂を転がり落ちていく。

息ができない。苦しい。

両腕で頭だけは守る。

岩肌が頭、腕、脚——背中を容赦なく削いでいく。

痛い、痛い、痛い、痛いッ!?

痛みを耐えて、転がり続けて——蜂の羽音が途中で聞こえ、大地が脈動するような、尊大な何かの傍を転がり——微かに見える、白い糸の巣。

その中に——彼或いは彼女がいた。

「…ア」

痛みを忘れ、眼を奪われた。

その姿は予知夢で自分を食った蜘蛛と同じ。

だが洞窟で初めて見た絹のように透き通った、綺麗な白い体毛。光る紅玉のような、暗い場所でも見える美しい複眼。言葉を尽くそうとしても、その美しさの前に自分の語彙は陳腐に過ぎた。

「…綺麗、麗…だナあ…」

最早、満身創痍だ。

トカゲ相手から貰った一撃は折角延命の為に止血した蜘蛛の糸を無残に切り刻んでいる。背中から発する熱はよもや自分の体温を全て奪っているのではと感じてしまうほど。痛い、ではなく熱い。それも鋭いのではなく^{痛み}焼き鏝を押し付けたらこうなるような、全面的な^熱。

出血が、自身を覆っていく。気紛れでもない限り、蜘蛛の魔物は自分を捕食するだろう。例え運良く見逃されたとしても、この勢いで血を失えば死ぬ——自分がまきこんだかもしれない、若葉さんを見つけれないまま。

「……………ごめ——」

視界が潤み、周囲が暗くなっていく。

その視界がアルビノの蜘蛛に埋まっていった。

4 1人と1匹、そして1柱

眼前に広がるのは、無骨な岩盤だった。背中は高い場所から叩きつけられ、岩肌に削がれたかのような惨状。

「…ッ」

然しその岩盤の天井は、かなり遠くに見える。途中途中で白い蜘蛛の巣が見え、その上でアルビノの蜘蛛が巨大な蜂と相對していた。アルビノの蜘蛛は初めて会った時と変わらず絹の体躯と紅玉の複眼。然し、その体躯の背にあたる部分にさらに濃い白の紐が巻かれていた。…あの蜘蛛の知性が高いのか、或いはアルビノの蜘蛛が特例なのか。微かにぎこちない動きから、恐らく怪我を治療した物なのだろうと見てとれる。

自身の体が動くかを確認する。手足は何れも動く。周囲を確認すれば、相對する蜂と同じ姿の糸に巻かれた死骸が無数に並んでいた。特に蟲の好き嫌いはない自分だが、死骸がある場所を好むかと言われたら断じて否である。小さく顔を顰める。

然し、周囲を見る限り特に敵はいないように見える。自分の遙か上でアルビノの蜘蛛と巨大な蜂が戦闘をしているが、その途中途中に蜘蛛の巣が張られていた。少なくとも、ノータイムで落ちてくるという事はないだろう——漸く得られた、安全。

張りつめていた意識が緩み、背中の激痛に顔を顰める。それで漸く体を見て、自身にもアルビノの蜘蛛の背中に巻かれた物と同じ物が巻かれている事に気付いた。アルビノの蜘蛛は、どうやら治療してくれたいらしい。何故？分からない。

次に気を失う前まで使っていた折れた槍の切っ先今後は短剣と呼称するを探す。…無い。

どすり、と上から鋭い何か突き刺さる音。——アルビノの蜘蛛が、蜂に刺されたのかもしれない。慌てて上を見ると、短剣を紐に括りつけ、投擲することで蜂を仕留めた蜘蛛が居た。…恐らくアルビノの蜘蛛に限って人間並みの知能を持っているのではなからうか。

呆けるように蜘蛛の方を見ていると、アルビノの蜘蛛が此方に気付

き。仕留めた蜂を粗雑に張った巣へと投げつけて此方に来た。思わず身構え、アルビノの蜘蛛の動きを見据える。此方に来た直後――

「(ちよ、ま)」

顔の四方と両肩及び両脇が小さな爪で圧迫される感覚からして、どうやら顔に飛びついたらしい。四方の内の一か所が離れ、此方の頭を揺り動かす。：行動にいずれも殺意はない。下手に刺激して敵意を買うよりは、じつとしていたほうが得策だろう。

>>

結構な時間頭を揺り動かされた。未だにぐらぐらする視界のままアルビノの蜘蛛へ眼を向ける。やり過ぎたと当人蜘蛛だが人並みの知能を保有してそうなので問題ない筈も思ったのか8本の足を蜘蛛自身の胴体へと集め、正座のような体勢となっている。

「：助けてくれて、ありがとうございます：厚かましいお願いですが、それを返してくれませんか？」

最初の言葉に蜘蛛は小さく頷き、お願いを聞いた時に小さく焦燥した。命の恩蜘蛛であるのは分かっているが、自分が現状持ち得る唯一の護身具なのだ。それを手放すのは余りにも惜しい。

だが、相手からしたら”狩りを効率的に進められる道具”でもある。先ほどの投擲で蜂を仕留め、保存食として糸に巻いて死骸を溜め込んでいるのだろう。いずれの死骸も刺突による致命傷だった。

自分の厚かましいお願いに、うんうんと悩む蜘蛛。：初対面にもかかわらず、随分と人の好い蜘蛛らしい。自分を貪り食ったそれと色以外は違うというのに、随分な違いだ。：思い出して、顔が青くなる。小さく、蜘蛛が首を傾げた。：どういいう意図があるのかわからない。同じように首を傾げ返す。

短剣についての取引は、奇妙な沈黙という形で膠着した。

>>

現在、蜂の死骸から針を引き摺り出す作業をしている。死骸の数はおおよそ5体程度だが、何れも保存状態がいいとは言えない。その為針を壊さないように摘出するのに苦勞をしていた。

結局あの後自分の空腹を知らせる腹の音で、アルビノの蜘蛛が保存している蜂の死骸5つと短剣の交換と相成った。：アルビノの蜘蛛とてモンスターである。これ以上の譲歩を求めようものならもしかしたら此方を攻撃してくるかもしれない。それに蜂は日本でも食べられる。蜂の子が有名だが、成虫もつくだ煮やてんぷらという形で食べられる事を考えれば、生きる為の食糧確保としてトレードオフなのかもしれない。

火を通す手段がない以上、毒である針は除去する必要がある。そして此処まで巨大な蜂であれば、毒針をそのまま武器として使えるかもしれない。アルビノの蜘蛛の投擲技術は高い、ならば弾数が1の短剣と弾数が5の毒針はトレードオフになる可能性がある。

自分の胡坐の上で睡眠を満喫しているアルビノの蜘蛛を傍目に、1本の針を摘出した。蜂に巻かれた糸をそのまま利用し、端を縛った後一端を甲殻で挟む。その後糸をグルグルと巻き——簡易的な持ち手の存在する毒針以後、加工した毒針と呼称するが完成した。残りの蜂は食べて行く——甲殻は硬くて食べられるものではなく、かといって内臓はえぐみを伴う不味さ。蜘蛛のモンスターだからこそ、食料とできたのだろう。

だが食べなければ餓死する以上、蜂で慣れる必要がある。

蜂を食べ終え、次の蜂の死骸へ手を出す。：寄生虫については、この際どうしようもない。当たらない事を祈ろう。

>>

アルビノの蜘蛛が起きる頃には、どうにか加工した毒針が3本出来上がった。2つの死骸はそれぞれ下半身がない、或いは酷く拉げている為針を探すことは断念した。現状空腹は解消され、徐々に余裕が戻ってきている。：自分が蜘蛛の後について行くことはできない以上、此処でお別れとなるかもしれない。

そう思いながらも、未だアルビノの蜘蛛はわざわざ此処まで降りてくれる。：それに甘えて、もう少しだけ。此処に居ることにした。

>>

徐々に上へと向かっていくアルビノの蜘蛛を見る。モンスターだ

からか睡眠時間は短いらしく、体感ではあるが2時間少しで目覚めて上へと向かっていった。時折蜂の群体を相手にしているが——大地の脈動する、尊大な何か。その気配に、息が詰まる。

そしてそれが、上へと向かっていく蜘蛛の巣へ狙いを付けたのだと。視線から察した——それに足蹴とされながら、自分はアルビノの蜘蛛が隠れるだけの時間を作り始める為に声を上げた。

「ッ、隠れてッ！」

言い切ると直後。

尊大なものの口から放たれた、巨大なものが風を切る音。

瞬間的に伴う静寂——否、炸裂した轟音によつて耳が機能せず耳鳴りばかりが響く。

そして——崩落してくる天井。

——大地の脈動する、尊大な何かというのは一切の間違いではなかった。四つ足の狼のように歩くそれは、一撃で洞窟に新たな通路を作り上げた。

慌てるようにアルビノの蜘蛛と過ごしてきた巣の下層から出ていく。その崩落の中でさえ、尊大な何かは気にすることなく——瓦礫が自ら尊大な何かを避ける。

「…は、は…」

この現実には、泣き笑いを浮かべるしかできない。灰色のトカゲ等とは、格が違い過ぎる。幸運にも吐息には当たらなかったが、直撃して居たら死ぬ。もしも四肢一本を置いたとしたら跡形もなく消し飛ばさるだろう。逃げようと、足を動かし。

それが、此方を見た。心臓を掴まれたにも関わらず強引に脈動させられるような、息苦しさ。

「——死んで、溜まるか」

眩く。尊大な何かは、興味深そうに此方を見る。目をつけられるなど、恐れ多い。ただの一般男子高校生でしかない自分など。

「生きる、やってやる——本気で来いよオ!!」

潰されそうなほどの圧、心音がうるさい。咆える事で、誤魔化す。土と涙で、泥の付いたみつともない顔。それでも、尊大な何かは此方

から目を逸らさない。このまま、逃げようとするなら先程の一撃で新たに通路が開設されるのは…何となく、察した。

勝利条件——尊大な何かからの逃亡。

勝利条件を満たす為の最低限の行動——尊大な何かの五感を封じる或いは尊大な何かの気紛れ。

5 無望

逆手でそれぞれ加工した毒針を構える。左側を前に、右側を後ろに。半身となる事で相手からの攻撃に対する被弾範囲を少しでも減らす。狼龍はそれを見ても特に動く様子はない。：それはそうだろう。

龍と人。伝説で語り継がれるそれを相手するのは、同じ伝説の存在であって現代の誰かではない。伝説から見た自分は、其れこそ路傍の石未満の筈なのだ——だというのに、目をつけられた。泣きたい、いや、既に泣いている。

狼龍が此方を見続ける。特に圧をかけてきている様子もない、ただの自然体にも拘らず自分の足は震えが止まらない。そして思い出すのは、予知夢。自分自身の解体ショーという形で見た死は——不幸にも、自身の震えを止めるだけの材料となってしまうた。

それでも、加工した毒針の先端は小さく震えている。掌の痛み、そして静止する先端と狼龍。

「…行きます」

震えた声で、小さく呟き——相手の懐へ21歩飛び込んだ地点で狼龍の爪が無造作に振り下ろされた。小さく屈みつつ、振り下ろした脚の方へ転がるように避ける。腕が岩肌で傷つくが、そんな物はどうでもいい。どうでもならないの前では、小事でしかない。

一瞬間を開け、振り下ろした爪を此方に返すように狼龍は斬りあげた。それを上体を上げた後一歩下がるようにして避け、踏み込むませまいと狼龍のもう一方の前脚が襲い掛かった。振り下ろされる脚の方へ自分を滑り込ませ——右肩の表皮がぱくりと割れた。

「ッ”アア—」

痛みを無視して降ろされた腕目掛けて加工した毒針を振り抜く。対して狼龍は回避することなく、鱗で受け止めた。鈍い音、そしてあつけなく悲鳴を上げる毒針。やはりというか、鱗は硬——体が、無造作に払い除けられる。羽虫を掃うように、だというのにそれだけで小さく吹き飛ばされた。

着地後、自身の悪寒に従つて即座に右へ転がる。自分の居た場所の地面を食い破るように土で出来た無骨な槍が姿を露わにした。続くように自分を3方向から囲むように無数の槍が現れ、徐々に後ろへと追い込まれて行く。此処で狼龍に背を向ける等という真似は出来ず、ただ後退りを土の槍から離れるようにするしかない。——あともう少しで、自身の背に壁が接するとしても。

あと数歩、槍の高さはだいたい自分の背丈と同じ程度。それを見て——遊んでいると、苛立ち及び微かな希望と共に察した。それこそ、先程のように吹き飛ばされた地点でブレスを撃ち込めば自分は対処する間もなく死んでいただろう。だがそれをしなかった。

その苛立ちを、狼龍へ立ち向かう蛮勇へと換える。微かにみなぎる四肢、それで壁を蹴つて三角跳びをする事で槍袈を突破する——踵が、着地した場所にあつた瓦礫で削られたが、命には代えられない。狼龍は魔法の後に大きく咆え——悪寒と共に全力で狼龍が居た方向へ走る。踵から血が溢れるが、それ等構わない。

自分が居た場所の空気が、死んだ。

耳鳴りばかりが響く中、走つた勢いを殺さずに無事な脚を軸として体ごと振り向き。クレーターの中心にいる狼龍へ滑り落ちながらも接近する。狼龍は、飛び跳ねた勢いのまま背中中の甲殻を地面へ叩きつけたため起き上がる隙を曝していた。故に、反撃されずどうにか頭にしがみつく。それを振り払おうと狼龍は頭を数度振るが——ここが、一度目の勝機。左眼目掛けて折れかけの毒針を突き込む。

鱗が硬い以上、狙いは粘膜を直接さらしているように見える目や内部にあたる口、耳等極限られた一部位。流石に異物を突き込まれればたまつたものではないらしく、頭を数度振られ——しがみ付いていた両手の爪が、鱗の隙間に残され振り落とされる。受け身はどうにか取れた、が……本目の加工した毒針を手に取りろうとして一瞬硬直してしまつた。

その隙を狙うように、奴は肩から突っ込んだ。交通事故を思わせるような一撃で、此方の体が悲鳴を上げる。

脳が焼ける。痛い、体が止まってしまいそうになる。

——予知夢のあれは、もつと痛かった。

爪があつた場所から血が流れ、加工した毒針の取っ手が滑るが。それでも握った手は離さない。まだ、奴はいる。睨むように、目を向ける。狼龍の目がボコリと一瞬膨らみ上がった。刺した毒針は、その肉に潰されて折れた状態で地面に転がった。

「…、急所も、超回復…」

体中を痛め、両手の爪と片足の踵を犠牲にして行つた一太刀はまさしく無意味。思わず悪態をつきながらも、相手の視線から地表食い破る槍の出現を読んで踏み込む。此処でもブレスを使わない——即ち目を潰しても再生されてしまえば意味など無い。その舐めプが、自分を生かしていた。

まだ蛮勇はある。

死んでたまるかという意志もある。

体は十全とは言えないけれど、灰色のトカゲの時もそれは同じ。寧ろ、休んでた時期がある以上今の方がましだった。

それでも、狼龍を越えるにはあまりにも足りない。再度顔面目掛けて加工した毒針を撃ち込む。前に前脚で地面を掬い上げた。飛んでくる砂利の散弾を、腕の付け根に飛び込むようにして躲す。したところを半身で押し潰さんと倒れ掛かってくる。隙間は狭いが、それでもまだ回避の道がある——そこへ飛び込む。挟まれた踵のある方は、微かに遅れたことよって傷口が押し広げられた。一瞬意識が遠のく。無事な脚で地面を踏みしめる事で強引に意識を取り戻す。

1分にも満たない、狼龍にとっては最早お遊び以下の何でもない死闘。強すぎるそれに覚えるのは恐怖と畏怖、そして——微かな敬意と全てを塗り潰す程の”生き残ってやる”という意思。

踏みしめ、再度飛び込む。周り込もうとしたところで、狼龍の旋回速度に自分が追い付けない。首を振り回された時に分かった事だ——狼龍は地面を一度見た。土の槍、その一撃。踏み出そうとした足の力を強引に前へ持って行く。その後の一歩後ろに跳びながらも加工した毒針を投げつけ——阻むように槍が毒針を砕く。残り、1本。砂を狼龍の顔面に振りまき、瞬間的な目潰しにする。その意図を

読んで尚、余裕を見せたのか目を閉じた——閉じる必要もない筈だ
というのに、閉じる時間は、異様に長かった。

その隙に甘え、アルビノの蜘蛛——白織の巣跡地に戻る。相手が
わざわざ準備時間をくれてやるという以上、甘えるしかない。手に糸
を巻き、止血していく——跡地、瓦礫の下に。

「な、ぜ？」

白織が独自に改造した短剣が、転がっていた。刃は何処か不気味な
光を孕み、柄には白織が投擲後に引き戻す為に使っていた糸が巻かれ
ている。…手に取る。白織の意志——”生きてほしい”という願
いを感じたような気がした。…恐怖で流した涙とは違う、微かな温か
さを伴う涙は砂利に混じる。

「…」

左手に、そのナイフを巻いて行く。左手に巻く理由は単純、利き手
でない以上握力がない。いざという時は右手の加工した毒針を捨て
て、左を軸に両手持ちすればいい。…これ以上は相手も待たないだろ
う、地ならしが聞こえた。

左手を前にして構え——そのまま奇襲を仕掛ける。狼龍は此方
の浅慮等読み切っているのだろう、無造作に尻尾で薙ぎ払った。うの
をやり過ぎ、尻尾の鱗の隙間に短剣と毒針を突き刺し、力尽くで剥
ぎ取る。…剥ぐことはできるらしい。剥いだ後の数秒で、新しく鱗が
生え始めている事にはなにも驚かない。狼龍だから。これ以上は必
要ない。

「オオオオアアアアアアアッ!!」

最早泣いているのか叫んでいるのか猛っているのか明確に分から
ない咆哮が自分の口から出る。相手は無傷で、自分は致命傷までは行
かずとも酷く痛めつけられている。

眼はつぶせない。五感をどうにかできる希望が薄すぎる以上、最早
気紛れに期待するしかない。

狼龍の気まぐれで勝^{生きるか死ぬか}敗を決められる戦いを、無謀ながらに再開し
た。

B 1 側近と”修羅”

>>>第10軍団長の場合

会議が終わり、第10軍団長の居る席に目を向ける。

既にそこにはいなかった。会議が終わる、その一言が発された直後に俺は目を向けたがその地点で居なくなっている。探知を用いてもそれらしき気配は城内に存在しなかった。勿論と言わんばかりにかのものも探知に識別されていない。

かのものが首を傾げて此方を見る。その眼は俺自身の奥底を見据えるような気味の悪さ。斑となった髪の毛も光を映さない目と合わせ、さつてさらに増長された。：試しに声をかけてみる。

「すまないが、所用はあるだろうか？」

：首を傾げた後、眉尻を下げて小さく会釈した後出て行ってしまった。やはりというか言葉は通じなかった。

これで分かったのは何れの言語帯にも属さない可能性がある事。少なくとも俺が使った言葉は人族で一般的に使われている物である以上、これが聞き取れないとなればそれ以上は思い浮かばない。

それと”思っている以上に人間らしい”事。首を傾げたのは恐らく話しかけられた言語を理解できなかったから。眉尻を下げて小さく会釈したのは、理解できず会話が成立しない事を申し訳ないという意味合いだろう。気味が悪いと思っていたが、それは単純に周りとの交流がままならない事が要因ではなからうか。

>>>第9軍団長の場合

「ん？修羅のことが聞きたい？」

頷く。

席を立ち、立ち去る所で第9軍団長へ話しかける。第9軍団長は少し考え、「まあいいか」という言葉と共に頷いた。直属とされている第10軍団長程は修羅を知らないだろうが、今は少しでも情報が欲しい。

「業務に携わらない程度で頼む。あまり時間はない」

「かたじけない。まずは修羅の名前を」

「聞いたことがない。曰く」自分の名前で生きていけるならこんなところにはいない」…だそうだ。当人も忘れてるんじゃないか？」

捨て子、だろうか。或いは摩耗して忘れたのか。どちらとも判断は付け難いが、少なくとも人族一般の生まれとはかけ離れている。魔族とも同様。幸運にも四肢を失っている様子はなかった。

「修羅の保有スキルは」

「無い」

「…なんだと？」

「文字通り無い。これについては修羅当人も分かっていない」

「——ふざける、鑑定や探知に引つかからないのはスキルが原因じゃないのか？」

第9軍団長は首を横に振る。これについては何も話せることが無いらしい。苛立ちを隠さずに軍団長を睨みながらも次の話へ進める。…第9軍団長が時計を確認した以上、そろそろ業務に差し障る頃合いなのだろう。

「最後に一つ。強さは？」

「平均を取ればまちまち。人型に対してめっぽう強い。それ以外は並み以下。…そろそろ業務の時間だ」

「分かった。すまないな、貴重な時間を奪った」

「いや、構わない」

さて、あまり気は乗らないが——魔王様の下へ向かおう。

「…信じないだろうな。タイマンに限れば、魔王ですら修羅相手には防戦を強いられるなんていうのは」

〽〽魔王の場合

「あー…正直に言うけど、把握できないよ。白が勝手に連れてきた人族で、技術力と応用力が高い。スキルは一度も使ったところを見たことが無いけど…多分全状態異常無効、全属性無効とかの常時発動型で埋まってるんじゃないかな？後は未知のスキルが有力な線ってくらい」

まさか、そこまで強いとは思っても居なかった。絶句したまま魔王

様を見る。纏う雰囲気は何処か面倒そうだが言葉に嘘は見受けられない。…事実なのだろう、だがそうなる疑問が上がる。

「ならば何故、彼は軍団長に指名していないのですか？」

「まずは言語ね。軍団長である以上、配下とのコミュニケーションができないとお話にならないから」

「それこそ彼を重用している者達に」

「それ以上に、彼の強さは正しく対人の極み。人型以外に対しては私達や軍団長——或いは平民も倒せるような蜘蛛にすら苦戦する。安定しない強さだから、迂闊に軍団長にして他の魔族に討ち取られる事態は避けないといけない」

波がある、どころではない。

最弱のタラテクト種に苦戦するが、第9軍団長の言葉が事実であれば人型ならめっぽう強い。確かに安定しない強さを持つ存在を軍団長にするのは憚られる。

「あとは、白からのお願いね。直属にしてほしい、と。彼が望まない限りは戦場に出さないでほしいとも。彼は戦場を望んでいるけれど」

「…白の私情、という事で？」
「そうね」

淡々と魔王様は答えた。だが、此処で得られた情報は大きい——
第10軍団長は修羅に対して何らかを懸念している。

「修羅が此処に来た目的は」

「人探し、そう言っていたわ。15年探し続けて未だ見つからない中、白と出会って流れのままに。そうしてたら色々な事態に巻き込まれて今に至る」

「…探している人が生きているという保証は」

「無いわね。あと一つ位なら答えるけれど」

一つ。そう言われて考える。此処が恐らく修羅の事を聞ける最後の時間だろうとなんと無事に察した。

然し、知りたい事は悉く”知らない”分からない”把握できない”

”…寧ろ自身の目で確認したほうが早いのでは、そう感じ始めた。

「…これは頼みなのですが」

「バルトが頼みなんで、珍しいね。私が聞ける範囲であれば答えるけど」

「修羅との合同作戦を組むために、第10軍団長に話を取り次いでいただきたいのですが」

「…んー…」

魔王様は気乗りしないのか、小さく唸る。5分程その状態が続き――

「うん、良いよ。私から白に話を通しておく。その際に”修羅の意志を優先する”ってつけておくから修羅の意志依存になるけど、それでもいいかな？」

「ありがとうございます」

6 変遷

振り向き、狼龍の視線と自分の視線が正面からぶつかった。その眼に未だ殺気と呼べるものは存在しない。叫びと共に踏み込む前に、一拍間を空けると既に左前脚が振り下ろされていた。それを見送り、前傾姿勢を取って止まる。——続いて振り下ろされた右前脚の鱗、その付け根目掛けて左手を振るう。

ガイン！

金属音。短剣は加工した毒針よりも丈夫である。対して鱗の方は薄い線が一瞬にして消えた。鱗にも超回復が付与されているという悲報はあるが、短剣は鱗よりも硬いというのは朗報だ。強引に突き込めば、鱗は貫通できる——尤も、超回復された地点で全てが無に還るが。

両前脚を軸に狼龍が1回転。その巨体で振るわれるそれは広範囲を無差別に薙ぎ払っていく——それを前脚に居座る形で頭上を狼龍の腹が通り過ぎた。前脚の隙間を抜け、右手の加工した毒針をもう一度目に突き込む。く前に両前脚をばねのようにして飛び退いた。直後此方へ一睨した狼龍に合わせ、間合いを詰めていく。背中越しに聞こえる大地を食い破る音は此方の恐怖心を増長してくるが、全身の痛みが恐怖心を塗りつぶした。

前方は狼龍、後方は大地を食い破る槍。狼龍の自然体からですら放たれる圧を食いしばって耐えながら進む。狼龍は、何もしてこない。突き進み、狼龍の頬に左腕を振り抜く。

ドスリ、という確かな手応え。そのまま振り抜こうとして——正面に、大口が見えた。

ま、ず——!?

眼前に広がるのは、無骨な岩盤だった。

狼龍の大口を最後に、意識が完全に飛んでいた。叩きつけられたかのような鈍痛に全身が苛まれる。

「…ッ」

身を起こそうとしても、動かない。だが——小さく、安堵の息を吐いた。意識を失った後に、狼龍の気紛れか何かでそのまま離れたらしい。此処から離れたように、足跡が残っていた。

右手は加工した毒針を握っている感覚がある。左腕へ、意識を向け——予知夢で感じた考えていることが全て無くなってしまうような熱。

「ツ!？」

左腕へ眼を向ける。無かった。肩から先が弧を描くように失われていた。悲鳴を吐き出そうとする口を、噛み締める。折角狼龍から生き残ったというのに、此処で叫んで蜘蛛や蜂、灰色のトカゲ等と呼んでしまえばすべてが水泡と帰る。

痛みから守るように丸くなる。左腕からの痛みと比べてしまえば、全身の鈍痛等気にも留める必要が無かった。不幸中の幸い、とでもいうべきか。左肩から血は流れていない——焦っていた。

>>

痛みに呻いて暫くした後、体をどうにか起こす。

白織が紡いだ糸は、灰色のトカゲの前に居た蜘蛛のものより強度が高かったらしく、背中 of 傷口と右腕に巻かれたそれは特に傷ついている様子がない。自分が直接受けたものは其れこそ交通事故を思わせるようなタツクル位——思い出し、胃の中に何も無いにもかかわらず吐き気がした。それを我慢するだけの精神力は既にない、口からこぼりと胃液を吐き出す。

立ち向かう時はよかった。目の前の事だけに、集中できたから。

胃液ですら空となったと錯覚するまで吐いて、漸く思考に戻る。：なんと無しに剥いだ狼龍の鱗を手に取り——左腕の代わりとは決して言えないが、何も獲得できないよりは。そう思いつつポケットに入れた。

これから、どうするか。

白織の巣跡地を拠点に過ぐそうと思ったが、首を横に振る。狼龍の巡回路である可能性が出てきた以上、此処には長居したくない。その上で水源と、贅沢を言うのであれば食べ物が欲しい。此処にない以上

遠出する必要がある。

かといって今まですらまともに戦いが成立しなかった存在が徘徊している環境下、片腕で戦えるかと言われたら当然否。せめて短剣並の丈夫な武器を欲するのは贅沢なのかもしれないが、護身用が加工した毒針だけではあまりにも心許ない。

暫く考え、出した結論は——狼龍の足跡を追うだった。時間がどれほど経ったのかは分からないが、少なくとも気を失った自分は奴らからしてみれば簡単に命を奪い食料とできるだろう。それが為されないとなると、恐らくだが狼龍を恐れて狼龍の通り道に近づいていない可能性が出てくる。動物の縄張り主張と似たような物だと見れば、強い同族に弱い同族が近づかないのは当たり前だろう。余程その立地が良い、そこにしかない何かを渡したくないというような特殊な条件下でもなければ。

ならば見た限り尊大だと思つた狼龍の通り道を阻むような奴らもいるとは思えない。そこを自分が通る。一番のリスクは狼龍に再度目をつけられる可能性が高い事。然し他の奴らからの襲撃を気にしなくてもいいというのは大きい。

なら、行かなければ。

立ち上がる。左腕を失つた為か、体重移動がうまく行かない。ふらつくが、周りは決して待つてくれない。

そう言い聞かせて足を踏み出す——狼龍が向かったと思われる道へ。

「探さないと…生存すら、怪しいかもしれないけど…」

>>

結論を言うのであれば、この策は成功した。

先ずは水源の確保。狼龍も水を飲む必要があるのか、足跡の先に鍾乳洞のような天蓋となった湖があった。岩壁に大量のタニシのような何かが居たのが少しばかり気持ち悪いが、水源を見つけられたのは大きい。…濾過する道具も、蒸留する道具もない以上生水を飲むことになる。お腹に合えばいいのだが。

引き続き護身具の確保。此れも水源に向かう途中に存在した人の

死体から長剣を手に入れる事が出来た。その死体は盾も持っていたが、隻腕となった自分には不要の長物だ——鞆付きの長剣と、背負っていた鞆を取る。鞆の中に食料などあるかと思ったが何一つなかった。死体に傷が然程ない所を見ると、恐らく餓死ではなからうか。

そして壁についているタニシを食べた様子がない。近くにいたにも関わらず。そうになると、恐らくは食べたら有害だろうと予想を付け
——ひらめく。

——相手の傷口にあれを突っ込めば、優位に立てるのでは？

∴それは後々試そう。

水を飲む。∴乾いた喉に冷たい感覚が流れ込む。潤いを取り戻した口から「ぷは」と息を吐いた。ただの水が、とてもおいしい。

水を飲んだ後、片腕で長剣を振るう為の訓練をする。片手で2kの鉄の棒を振るうのは辛い、剣道で竹刀を振っていた経験が此処で生きた。時間間隔はすっかり失ってしまったが、護身具としては問題ない程度に扱えるようになった時間は短かったと思う。

食料は、残念ながら蛇や蜂等からはぐれを狙い、此処まで誘導して殺す事で確保する必要がある。狼龍との戦いのお蔭で、他の奴らに怖気つく事が無くなったのが大きい道中で単独活動する蛇や蜂、蜘蛛等と遭遇したが、撃退出来ていたから。狼龍に比べれば余裕がある。油断は一切できないが。

>>

——ドオン∴

上から、大きな音が聞こえた。

∴白織は。若葉さんは、無事なのだろうか。

「∴此処を拠点として、探し始めますか」

死体からもらい受けた鞆から、水袋を取り出す。湖から水を汲み、だいたい半分で入れるのをやめる。長剣を構えた状態で戦闘に支障をきたさないのがそれ位の重さだったから。その隙間にタニシを詰めていく——初めは気色悪い感覚があったが、今ではすっかり慣れた。慣れとは恐るべきものである。

加工した毒針は鞆の横に括りつけ、長剣は腰の鞆に納める。そして――かなりな枚数の羊皮紙と、インク付き羽ペンで鞆から引つ張り出す。余裕がある時は、地形を覚える為にマッピングをするようにしていた。そのおかげでこの付近は比較情報がまとまっている。

…何かに集中していなければ、不安で心が押し潰されそうだから。

7 途絶

…汗が流れる。脱水症状となる前に水を口に含める。汲みたてでは冷たかったそれが、温くなっていた。…嫌な予感がする。

だが、進まなければ。

1歩1歩進み続けていくと、先が眩しい通路を見つけた。何時以来の光だろうか、少しばかり眩しい。その光の中に、陽炎が映っていないければどれほどよかったか。

嫌な予感は、既に確信へと変わりつつある。

「…いや、まだ…見ていない…」

微かな期待に縋るよう、祈りながら歩いて行く。その確信が外れてほしい——それは、辿り着いた後の熱気で全てを焼き尽くされた。

光の先に広がっていたのは、広大な溶岩地帯。ぽたりと落ちた汗が、地面で蒸発する。この服装で向かうにはあまりにも過酷にすぎた。心なしか白織の糸も熱でよれてきているような気がする。

「は…はは…」

その光から自ら離れる。否、離れざるを得なかった。羊皮紙に書き込んでいったマップを思わず握りつぶす。洞窟から出られるかもしれない、そんな期待は砕かれた。

否、逆に考える。若葉さんは、少なくとも此方から洞窟を出る事は出来ない。もしかしたら洞窟内で合流ができるかもしれない——尤も、自分も若葉さんもただの人間でしかない。若葉さんの亡骸が見つかるとは思えないし…自分が亡骸となるかもしれない。

熱いにもかかわらず、背骨に氷柱を突きさされたかのように悪寒を覚えた。

「…」

光から名残惜しく思いながらも目を逸らす。…向けた先は今まで歩いてきた道。その先は一度光を見たせいか、猶更に暗く見える。

だが、自分が探せる場所はこの暗闇の中しかない。…心が悲鳴を上げるが、それを無視するように駆け下りていった。

>>

地底湖に引き返す。此処まで来たら温度は比較快適だ。少なくともあの溶岩地帯よりは。

人の死体の衣服はどうだろうか。そう思ったが首を横に振る。革で出来た鎧と、麻布のズボンではとてもじゃないがああ溶岩地帯を抜けられるとは思えない。たぶん、別の場所から来たのだろう。

「…」

羊皮紙に書き連ねたマップを広げる。1歩を距離として簡単ながらも測量した結果、白織の巣跡地から地底湖迄2000歩。自分の背丈からして歩幅はだいたい0.9mなのでおよそ18km。地底湖から溶岩地帯に繋がる出口迄14000歩なので12.6kmあたり。これだけでも、とてもじゃないが広大すぎる。奴らがうろついている中で若葉さん或いは若葉さんへ繋がる痕跡を虱潰しに探すのは無謀だろう。

…でも、自分にはそれしかできない。地底湖の水を水袋へ汲みなおし——後ろから、地面を這う音が聞こえた。長剣を引き抜き逆手順手に比べて可動域が狭いが、力を込めやすい為。一撃で貫通させる事を念頭に置いた結果、此方の方が安定したに構えながら振り向く。

目の前に映るのは巨大な牙。伏せて回避しつつ、切っ先で突き上げる。空中であつたが故に回避する事も出来ず、蛇の胴体に裂傷が出来上がった。そのまま地面へつき刺す。前に蛇が捻ることで自ら切り口を広げながらも離脱した。胴体半分が斬られていながらも、特に問題なく動いている辺りやはりというか奴らの1種類なのだ実感する。

鞘へ長剣を納めると同時、蛇が尾を振るってきた。蛇、とは言っているがその姿は自分の3倍以上の巨体。故にそれなりの速さで振られる尾も十分に脅威だ。壁を蹴るようにして尾を飛び越す事でやり過ぎし、鞘へ手をつ込みタニシを持つ。手元にぎちぎちと動くタニシが気持ち悪いが、現状最も奴らに負荷を強いる事ができる物だ、我慢する。

振り抜いた勢いのまま、蛇は尾を地面へ叩きつけた。巨体から振り下ろしの一撃を貰おうものなら、巨体と地面に圧殺される。そしてギ

リギリで躲そうとすれば地面を叩いた際の衝撃で飛ぶ瓦礫に削られる。

故に大きく跳んで躲す。着地の隙を狙うよう、素早く此方へ這ってきた。：その胴体の傷が無ければ、これで勝負はついていただろうが。残念ながらその傷が蛇の初動を遅れさせた。体勢を整え、躲すだけの余裕ができる。

横へ1歩躲し——胴体の傷口に右手に持ったタニシを叩き込む。蛇が痛みで暴れる前に全力で走って距離を取る。ろうとしたところで想定以上に早く暴れた。蛇に向けた自分の背中に、胴体の質量がぶつけられた。

「……かふ」

息を吐き出しながらも、どうにか前へ走る事で追加で一撃を貰うのを避ける。蛇は、タニシが貪る胴体をどうかしようにと動くが、皮の内側に捻じ込まれたタニシを取り除くには至らない。内臓でタニシの殻が割れようものなら——タニシの体内に存在する腐蝕の体液が散布される。

前に思いついたことタニシ虫アタック。前回のあとがきを参照は、大型の奴らに有用だった。小型の奴らはそもそも小柄故の体力の少なさから一撃目で急所を狙った短期決戦となることが多い、タニシを使う必要性が無かった。だが大型の奴らは、体力が多く自分が疲弊してしまう程度には長期戦となりやすい。故にタニシを試用し——有用性を見出せた。

内臓にタニシの体液をかけられた蛇は、初めはその場でのたうち回るように大きく暴れていた。だが、徐々にその暴れは小さくなっている。

：蛇の生殺しは人を噛むという。ゆえに徐々に動きが無くなるのに合わせて近づきながら長剣を逆手に抜き——頭へ切っ先を突き立てた後、体重移動で口を2つに切り開ける。

対蛇は、だいたいこれで終わる。

息絶えたことを確認し、巨大な蛇の可食部位を長剣で抉り出している。先程の溶岩地帯で水分を飛ばせば干し肉のような保存食となる

のだろうか？…それを試す為に、鞆に入るだけの可食部位を切り分けていく。

>>

切り分けていく。タニシの体液が胴体の傷から広まっている場合、黒ずんでいる為そこは残す。黒ずんでいる中で生きているタニシは再度回収し、鞆の中へ。…タニシも奴らの一種なのだろう、鞆の中に放置されていても特に力尽きる等の様子は見せていなかった。

「…あ、でも鞆はタニシと水袋でいっぱいだ…」

ぽつりとつぶやく。仕方ない、タニシの中でも比較大型の物を選別していく。最終的には5匹まで選別されたが…その5匹が想定以上に大きい。まさか手のひらサイズまで成長していたとは。

「…」

首を横に振る。タニシに名前をつけて、愛でようとする程度に先程の失望は大きかったらしい。

「独りは、嫌だよ」

誰もいない。そう分かっているながらも眩かすにはいられない。睡眠は頑張つて取るようにしているが…予知夢のせいで、まともに眠れなかった。夢を見ない位深い眠りに就こうと思っても、この状況下で熟睡できるほどの精神を自分は持ち合わせていない。

…白織と一緒に居た時が、最後に熟睡できた時だろうか。

「…また、会えるかな」

分からない。そもそも生きているのかすらも怪しいこの環境だ。

「白織が。若葉さんが、無事でありますように」

せめて、祈る。自分が1人と1匹にできる事がこれしかなかった。

祈り終えた後、死骸は溶岩地帯とは逆の方に存在する坂道へ転がり落としていく。死骸を転がしてから瓦礫に隠れ。音に気付いた奴らが坂を下りていくのを見送った後に溶岩地帯へと向かった。

8 認知

目を覚まし、周囲を見る。
何も見えない。

：制限時間を迎えつつある。剣を杖に体を起こす。洞窟の中に限れば目が見えずとも走ることはできるようになっていた。それほどまでに慣れ親しんだ道だが、前に目を覚ました時よりも歩き辛い。

ぼきん、と体から音が響いた。どうやら足の指が折れたらしい。でも、もう慣れた痛みだった。

ただ、その指で最後だった。故に、体は洞窟へと打ち据えられる。複数、硬質な物体の壊れる音が体内から響き渡った。

「ツ…あ…か、ふっ…」

息を吸い、血を吐き出す。全身が痛みで悲鳴を上げる。然して声にしようとしても出せるものは血ばかり。打ち据えられた衝撃からか、全身の治りかけの傷が一斉に開き、血で皮膚の感覚が満たされていった。：焼いて塞がれたはずの左腕からも血が流れ出ていく。

偏った栄養価によって引き起こされたビタミン欠乏症。蜂も、蛇も、蜘蛛も。何れも他の奴らや共食いによる食生活である事が観察によつてかなり前から分かっていた。だからこそ植物を探し続けている野菜や果物にはビタミンが含まれているから、その容量で行けば植物の葉や樹皮からビタミンを摂取できるかもしれないという希望的観測。が…この広大な洞窟を隈なく探しても見つかることは無かった。藻類ですらも、見つからない。

故に、自分がこの洞窟で活動できる時間は自分の体内のビタミンが無くなるまで。そして、その制限時間を迎えたのであれば何も抵抗はできない。体を動かさそうとしても、一切動かない。そうなれば、来るだろう。

聴力が捉えたのは振動する大地の音。狼龍とは別の、尊大な何か。此方に迫っている。腹ばいのまま、その気配から離れようとする。したところ、下半身全体が、上からの重量に潰される感覚が自分を襲った。

「が、あ…ッ」

腕の骨が折れながらも片腕でどうにか腹ばいに進む。下半身と上半身を糸のようにつなぐ内臓が、自分の中から引きずり出され、失われて行く。…予知夢を見て以来の感覚。

何も映さない視界の中へ、自分の意識は落ちていく。

眼前に広がるのは、無骨な岩盤だった。背中は高い場所から叩きつけられ、岩肌に削がれたかのような惨状。

「…」

目を覚ます。

…流石に二度二度目においてはかなりの長い時間を覚えているも起こってしまえば、認めるしかない。

「…死を起因とした…タイム、ループ…」

>>>

二度目の岩盤を見た地点で、この可能性には至っていた。あり得ないと、一蹴するために予知夢という仮の回答へ逃げた。

二度目で生き延び続けて、現代世界の動物をモチーフとした奴らがあり得ないと思っていた事の現実味を生み出した。

そして、今。

三度目に見た岩盤が、現実を突きつけてきた。二度目の最期——
ビタミン欠乏症による行動不能からの下半身プレス。あれが、洞窟で生き延び続けた結果。上も、下も行ける場所が無いというのにあの結末は、あんまりに過ぎた。

「…は、は…ッツウ…」

乾いた笑いが、背中への響く。体の一部を失う痛み一度目の解体ショー、二度目の左腕焼失及び下半身プレスと比較してしまえば、まさに過ぎる。苦悶の声を上げるだけに留め、静かにその場を離れていく。

…二度目で経験した事を、肉体は覚えていない様子がない。小さく舌打ちをする。左腕を動かさず感覚に異和を覚えた。時間間隔を完全に失っていたが、左腕を失った期間の方が長かった。かなりの時間を彷彿

徨い続けたのだろう。

「…二度目の、記憶なら…」

—— あった。下り坂。

二度目の時と同じように、学ランを反対に着込む事で簡易的ながらも背中を止める。紐で抑えていない以上、学ランに血が沁みているが——もしも、二度目と同じなら。小さく期待をしながら進んでいく。

そして、期待は裏切られなかった。

狼龍が、眼に入った。即座に隠れる。…意識は、此方に向いていない。背中は痛むが、歩けないほどではない。ならば、やり過ぎす為息を止める。

止める。

止める。

小さく、呼吸を1度。

止める。

呼吸をしようとし——心臓を驚掴みにされる感覚。

見つかった？

否、見つけたのであれば此方に何らかの行動を起こす——少なくとも、二度目ではそうだった。

止める。

止める。

息が、苦しくなってきた。

この状態から強引に脈動させられるような息苦しさをした時を思い出す。あれに比べれば、この苦しみはましだ。

止める。

止める。

先ほどの感覚がなくなった。少し大きめに、一呼吸。

>>

狼龍が眼を離し、地底湖に続く道へ姿を消したのを目視し——大きく、一息を吐いた。地面に小さくない血だまりが出来ているが、幸

運にも瓦礫に隠れる程度で済んだらしい。

蜘蛛の巣が張られていない一角へ、向かい——白い蜘蛛が蜂を必死に引き寄せる姿が、あった。

「…、大丈夫？」

白い蜘蛛——白織へ声をかける。蜂に対して意識を向けていた白織は此方の声に驚いたように反応を示し、こちらを見て体を固めた。

「驚かせたようなら、ごめんね。…自分も、一緒に隠れて良いかな」

少し考え、白織が頷いた。それに対して「ありがとう」とだけ返して隣へ座る。…白織が、此方——特に背中傷を気にしているように視線を向けた。

「…できれば、止血だけでもしてほしいな。その代わり、その蜂をこっちに引っ張っておく」

白織が反応を示す前に、糸を通じて蜂を引っ張っていく。暴れる蜂が、自身に対して毒針を向けて突いてきた。る前に毒針と繋がる腹を抑え、最後の武器である毒針を引き抜く。それにより、痛みに呻く蜂を見て、少し申し訳なく思いながらも白織へと蜂をそのまま渡す。…白織は戸惑いながらもそれを受け取り、武器を失った蜂にとどめを刺した。

「…白織」

白織が、首を傾げた。

「自分は、君の事を白織と呼ぶけど…良いかな？」

こくりと、小さく頷いた。

「…それじゃあ、よろしくね。白織」

…二度目では呼べなかった名前を、呼べた。それが、少し嬉しかった。

なおその後白織の糸によって背中傷を全面的に洗われ、激痛に呻くことになった。

>>

白織は自分を追い払った後に簡易的な巣を作り始めた。その間に此方は蜂の甲殻の一部を貰い、瓦礫で大きさを整えていく。彼女が巣

を完成させたのか、此方に手招きされたのを期に蜂の死骸と共に入る。

その中で胡坐となつて座る。

…白織が、此方の足の間へ眼を向けていた。

「…入る？」

直後、白織が胡坐の足の中へと身を収めた。背中の破れた学ラン、ワイシャツを毛布代わりに白織へ掛ける。

暫くした後、白織の脛が落ちて小さく体が揺れた。恐らく、睡眠だろう。

「…おやすみ」

寝たのを確認した後、毒針と蜂の甲殻を糸で巻く事で加工した毒針を作り上げていく。二度目の経験が生きているのか、糸の巻き方で小刀の柄のような糸の目を作ること成功する。

>>

二度目の起床後、白織が巣の拡張をし始めた。その際白織の代わりに上へと意識を向け、蜂を睨むようにして牽制する——お前らの殺し方は、二度目で分かっている。加工した毒針と、複数の礫を構える。

自分と、蜂のにらみ合い。白織は蜂を食べながら巣の拡張をし続け

——何れもその状態から変わることなく、無事に終わった。

終わった後、白織が足をつつく。

「…？寝る？」

頷かれた。苦笑いしながらも自分は胡坐をする。また白織が収まったのを見た後、同じように学ランとワイシャツを掛ける。…二度目の末期と同じ感覚で動いているが、肉体は何も経験していない時のそれらしく、徐々に眠気が迫ってきた。

白織が起きた後に、蜂の特徴を伝えてから。それから寝よう。